

英語教育におけるアクティブラーニング型授業の実践例とその効果 ——英語劇を事例として

熊谷 摩耶^a

^a 湘北短期大学総合ビジネス・情報学科

【抄録】

本稿では、近年重視されているアクティブラーニングを取り入れた英語授業の実践例の報告を行いたい。筆者は学習者が能動的に実践的な英語を身につけることを目的に、英語劇を作成する取り組みを授業内で行った。その実践方法および効果についての報告を行うことで、英語学習者へのアクティブラーニングの可能性について論じたい。

【キーワード】

英語教育、アクティブラーニング、英語教授法、異文化理解

はじめに

アクティブラーニング（以下 AL）が大学教育に導入されて以来、様々な方法で英語教育にも応用されてきた。AL という学習理念の定義は多様であり、本稿では AL の定義を改めて確認するとともに筆者が実践した AL 型授業の実践例、その効果、そして今後の課題について論じたい。そこで、2019 年度に本学で行われた相互授業参観週間にグローバルコミュニケーションセンターより「アクティブラーニングモデル授業」としても取り上げられた、筆者による講義「ジェネラル・イングリッシュ I・II」（以下 GE I・II）を事例として論じることとする。

1. 研究の背景

AL を導入した授業形態としては、学生が能動的に（active）に学び、発表やディスカッションなどのアウトプットを通して能力を身につけていくという点が重要になる。

周知のとおり、文科省中央審議会による「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～（答申）」（2012 年 8 月 28 日）では AL については以下のように定義されている。「教員による一方的な講義形式の教育とは異なり、学修者の能動的な学修への参加を取り入れた教授・学習法の総称。学修者が能動的に学修することによって、認知的、倫理的、社会的能力、教養、知識、経験を含めた汎用的能力の育成を図る。発見学修、問題解決学修、体験学習、調査学修等が含まれるが、教室内でのグループディスカッション、ディ

<連絡先>

熊谷 摩耶 mayakumagai2@gmail.com

バート、グループワーク等も有効なアクティブ・ラーニングの方法である。」¹ また、ALに関する定義としては、最も代表的であろう溝上によって「一方向的な知識伝達型講義を聴くという（受動的）学習を乗り越える意味での、あらゆる能動的な学習のこと。能動的な学習には、書く・話す・発表するなどの活動への関与と、そこで生じる認知プロセスの外化を伴う。」²とされている。

そこで、多様な試みが実践できるAL型の授業の中でも、GE I・IIでは英語劇を行い、英語学習者への効果を図ることとした。授業では、ICTを活用し学んだ英会話表現を使用し、4分程度の英語劇を学生たちで英語原稿を作成し、英語の台詞を暗記し、英語劇の発表を行った後に相互評価をするという形式をとった。つまり、英語の四技能全てを駆使し、かつ能動的に原稿を作成するためにグループワークを行い、実践するというAL型の授業の特徴が多く含まれると判断したからである³。本稿では、本学にて筆者による2018年度GE I・IIにおける授業実践の内容およびその効果についての報告を行うものである。

そのような英語劇の実践を通して、英語学習者への効果を図りたいのは以下の点である。すなわち①英語の四技能の強化に繋がるか②学習者が実践的に英会話を行うことができるようになったか、という二点である。本稿では、その二点の効果について述べていきたい。

2. 授業実践について

2.1. 授業の諸情報

当該授業は、総合ビジネス・情報学科観光ビジネスフィールド（観光エリア・留学エリア）の学生のみを対象として開講された必修授業である。授業は週に2日行われ、うち1日はReading、Grammar中心、2日目はListening、Speaking

中心の授業を行っている。なお、本稿で取り上げる授業は後者の授業での実践内容であり、筆者が本学に着任した2015年度より導入している方法である。

授業で中心的に使用した教材はOhyagi Hiroto / Timothy Kiggell 著『VIVA ISAN FRANSICO』（Macmillan LanguageHouse, 1999）である。なお、学生は紙媒体の教科書を使用せず、CALL（Computer Assisted Language Learning）演習室に導入されている同教科書のe-Learningシステムを使用しPC操作とヘッドホンを使用して同教材のリスニング、リーディング問題、スピーキングを行っている。

2.2. 学習者についての諸情報及び選出理由

2018年前期に授業を実践した際の学習者は、観光ビジネスフィールドの学生1年生42名（観光エリア31名、留学エリア（SELIC）11名）であった。まず、学生の諸情報について述べる。学生たちの英語能力としては入学時（2018年4月3日）に実施したTOEIC Listening & Readingの結果、観光ビジネスフィールドの学生のスコアは平均283、SELICの学生は293である。また、学生のレベルには差があり、最もスコアが高い学生のスコアは420であった。スコアは決して高くはないものの、就職先として観光業を希望する学生も多いため、英語学習への意欲は高い。

次に、フィールドの特徴を述べ、学生達の英語の学習環境、英語に接する機会等について説明する。SELICの学生は姉妹校であるオーストラリアニューカッスル大学への留学を1年次の10月から約3ヶ月間行う。一方、観光エリアの学生に関しては、長期留学はカリキュラムには組み込まれていないが、夏季休暇期間中に同じくニューカッスル大学へ2週間短期留学を希望すれば参加することができる⁴。また、留学に行かなくとも観光

ビジネスフィールドの学生の9割以上は国際交流委員会という湘北短期大学唯一の留学生達や、英語などの外国語に接する機会のある委員会に所属している。特に、毎年11月末～12月上旬の約2週間行われるニューカッスル大学との異文化交流プログラムであるExchange Programでは全委員が参加をしており、留学生と少なからず会話する機会がある。

このように、観光ビジネスフィールドの学生を調査対象としたことには以下の理由がある。すなわち①一部の学生たちはオーストラリアに長期／短期留学に行く予定があること②国際交流委員会に所属するなど、英語や異文化に触れる機会があること③観光業や海外に興味がある学生が多いことである。以上を以て、受講する学生は授業外でも英語に触れる機会があり、授業で学んだことを授業外でも活かす場が他フィールドの学生より多いことが確認できよう。そのため、英語に触れる機会が多いことから英語学習に留まらず、学んだ英会話表現を実践する場が多く、その効果をはかれると判断し、調査対象とした。

2.3. 授業実施内容

次に実施内容についての詳細を述べたい。以下



図1：CALL教室の設備

1)～6)の段階の詳細を述べ、英語劇の実践および評価を行ったので、各項目について詳細を述べる。

1) ICTを活用したListening, Speaking能力の強化

同教科書は主人公のケイコがサンフランシスコに留学し、その内容を状況に応じて記しているものである。授業では、その中でも学生たちが実際に留学先や国内での外国人との交流等で使用できるシチュエーション、単語、英会話表現を意識して章を選別し実践した。章は全部で20章あり、Part 1はサンフランシスコでの旅行、Part 2ではサンフランシスコでの留学生活について特化している。上述したように、ホームステイをする学生が多いこと、他の授業でも観光英会話に関する授業があるということから本授業では、主にホームステイをはじめとする現地の家族や教員・学生との交流を想定したPart 2を中心に取り上げた⁵。

まず、授業の初めに章の大まかな内容とタイトルについて学生に話し、どんな状況で今回の英会話が使われるのかという事を想像させるために、学生たちに質問を行う。例えばChapter11は、ホストファミリーの家での初めての会話について述べられているが、学生たちには自分が同じ状況だったらどのようなことを話すのか、ということを質問し、イメージさせる。学生たちが、その表現が使われる場面を想像したうえで先述したようにCALL教室に導入されているe-learningシステムを使用し、各自英文のリスニングを行う。その後、各自のペースで内容の把握を確認するための質問項目に解答し、各々が全問正解するまで解答を続ける。

2) リスニングによる英文の確認

1) の段階で凡そ 25 ～ 30 分ほど経過したあと、机間巡視を再度行う。よほど学生の進捗が遅れていない限りは、各自の学習を止めるよう声かけを行う。CALL 教室に導入されている e-learning システムには教科書の会話テキストも入っているため学生はテキストを見つつ何度もリスニングを繰り返すよう指示する。その後、内容理解の確認およびリスニング能力の向上のために、同じテキストを使用したリスニング問題を課す。学生たちが 30 分間聞いていた同じ英会話文であるが、その単元ごとに重要であると思われるフレーズを空欄にしたプリントを配布し、教員が音声のみを聞かせ、学生たちは配布資料の空欄を埋める。空欄の割合は単元によるが、英文を 3 回聞き終わった時点ではほぼ全ての空欄が埋まるようにしている。

空欄箇所の解答は、毎回学生に挙手で答えてもらい、教員と学生間に積極的な英語のやり取りを行い、空欄箇所となっているフレーズについての解説を行う。空欄を埋めた際には、教師からはそのフレーズの意味の確認、リスニングではどのように聞こえたのかを音声学の見地からの説明を行う。その後、教員が英文を読み、発音等のポイントを伝えた後に全員での発話、ペアでの発話へと移行する。

3) 英文の暗記および英会話表現について

本文の Q & A、リスニング、空欄を埋める作業をした後は隣の席の学生とペアになるよう指示し、英文を読みあう練習を行う。この際には机間巡視を行い、説明した箇所が正確に発音されているのか、感情を込めて読んでいるのかを確認する。これは、この後の演劇の構造および実践の際に必要な行為である。一通り終わったら、役柄を交代し、同じく英文を読みあう練習を行うよう指示をする。ここまでペアワークが終わったら、翌週は

今回出題した英文をすべて暗記し、テストを行うことを伝える。

英語劇は、上述したように英語表現を増やし、適切な状況でそれが使えるようにするためを行う。そのため、この段階で教科書に載っている正しい英会話の流れ、表現をすべて暗記し、実践の場に活かし、学習の成果を実感することで英語能力の向上をはかることが目的である。その後、英文の暗記を宿題とし、翌週に筆記試験を行う。平均して、学生の 95% 以上が正答率 90% を獲得している。これは、例年行っても変化のない数値であり、その後の英語劇の実践および、4. で述べる授業の効果においてもその有効性が確認できる。

その後、配布資料として単元におけるポイントを教員が作成したものを配布する。例えば、Chapter12 で相手の好みを尋ねたり (“Do you like ~?” “How do you like ~?” 等) 何かを申し出たり (“Can I help you with anything?” 等) それに対する受け答え (“That’s very kind of you.” 等) 等の表現が学習のポイントとなっている。その例文を渡し、各英語表現の違い、どのような場面でどのような相手に実際に使えるのか等の事例を交えて説明をし、英語劇にどのように使用出来るのかイメージを持たせるように解説を行う。

4) 英語劇のグループワーク開始 (英語原稿作成)

1) ～ 3) の段階を経て、ここでグループワークの開始を行う。各グループは年度によるが、3 ～ 4 名のなるべく少ない人数構成にする。人数が多ければ多いほど、役柄は増えて英語劇の内容としてはバラエティには富むが、一方でグループワークの作業量に偏りが出るのを防ぐためである。なお、グループ構成は学生に委ねず、毎回教員が各学生の英語のレベル、授業への積極性等を

基に事前に決め、学生に発表をする。当該年度の学生は合計 41 名のため、計 10 グループの構成を指示した。

グループメンバーの発表後は、学生は引き続き CALL 教室を使用し、英語原稿の作成にうつる。英語劇を作成する際に以下の点に留意するように指示を出す。すなわち、①項目 3) で確認した本文の英語表現および教員が配布した資料から必ず最低でも 3 つ表現を入れる②会話文は 3 分間分(最長 5 分)、最低でも会話が 5-6 往復ある③必ず暗記をして当日に臨むことである。以上 3 点を守れば、どのようなテーマの劇でも可としている。

その後、学生たちは①英語原稿②発表用資料の二点を Word 形式で作成し、教員にメールで送信することとなっている。なお、この方式は翌年からは google drive を使用し、共通のフォルダを教員が作成し、そこに各自が入れるよう指示をしている。

授業時間内に、学生たちはグループメンバーとどのようなテーマにした英語劇にするかについてのディスカッションを重ね、英語原稿を作成する。この時に、教員は机間巡視を引き続き行い、学生たちの質問に答え、無理な英語表現を使ったりしている内容はその場で訂正するようにしている。

5) 英語の発音・演技指導

英語原稿の作成が完了した後、教員による英語の発音および演技指導を開始する。まず、教員が作成した「台詞読み方のコツ」と題した資料を渡し、項目を一つずつ確認する⁶⁾。その後、グループ毎に英語原稿を基に発音・演技指導を行うがその際に、異文化への理解を深めるためにも、英語圏⁷⁾でタブーとされるような仕草や行動、発言等もあればこの時点でも修正を行う。また、日常会話としての口語的な表現は問題ないが、留学先で使うに相応しくないスラング表現等も注意を促



図 2：英語劇発表の様子

す。

6) 英語劇の発表および相互評価

当日の英語劇の発表は、グループ順に発表を行う。教室の選出基準としては、近年スマートフォンを使用した BGM や効果音を流し、Power Point を使用し場面の背景をスクリーンに映しつつ演技を行う学生が増えたため、PC が常設されており、背景に映せるほど大きなスクリーンがある教室を選んだ。例えば図 2 のように、学生たちは英語劇の内容に応じた背景を事前に作成し(この場合は旅行先の駅)、映して場面展開を分かり易く工夫している。

発表前には学生たちには 4) で作成した②発表用資料、すなわち各グループのタイトル、新出単語等を記した資料、そして一人一枚各グループに対す採点表を配布する。採点表に対する教員からの指示として、各項目についての採点基準、内容についての説明を行う。採点表は発表後にグループに返却するため必ず全項目を埋め、お互いの学習能力の向上のために好意的な意見だけでなく、改善点もあれば記すように伝える。なお、採点表の項目は以下の通りである。なお、項目①～③は 5 段階評価で採点するよう指示している。

表 2-1：発表採点表

①表現力（声の大きさ、適切さ、振り付け）
②発音（英語の発音、分かり易さ）
③劇のオリジナリティ（内容の面白さ、表現を適切に使用しているか）
④印象に残った台詞
⑤グループ内の Best Actor
<感想>

以上の項目を設けた AL 型授業としての目的は以下の通りである。すなわち、英語の学習歴等により発音は個人差があるが（項目②）その点の評価だけではなく如何に英語を積極的に、人前で話し表現出来るのかという点も考慮し（項目①）、グループ内のコミュニケーションを活発にできているかの確認（項目③）、そして聞く側が最後まで集中して発表を聞き、表現がどのような場面で作られているのかを確認（項目④・⑤）、発表者へのフィードバック（感想）である。

配布資料の説明が終わった後、学生たちは発表準備に移る。その際、発表者たちは配布資料に基づきタイトル、新出単語の音読、劇の見どころの二点を簡潔に話した後、劇に移る。学生たちは、一つのグループの発表が終わるたびに、上の採点表を記入する。これを、2018年度は10グループ分行ったが、各グループの演劇は短くて2分30秒、長くて3分57秒であり、全学生が最後まで集中し、評価を行っていた。

全10グループの発表が終わった後、教員のほうから各グループに対する講評を行う。どのように効果的に英語表現が使われていたのかなどの良かった点、改善点等を簡潔に伝える。その後、学生たちには机に顔を伏してもらい挙手で全グループの中で採点表に基づき最も良かったグループの投票、全学生の中から最も演技力等が優れていた“Best Actor”賞1名を選んでもらう。また、後日教員が英語原稿の内容から“Best Script”賞も与えることを伝え、演技力だけで学生を判断しないように注意をする。

このように、相互評価を取り入れる事で学生間のモチベーションを高めることを狙いとするが、一方で AL が得意な学生だけに評価が集中しないよう配慮する。

以上、全15回（各90分）の授業で1）～6）の手順を踏まえると以下の配分で行うようにしている。

なお、徐々に学生たちも要領を得て4）のグループワークの作業が第三回目の英語劇実施時には早くなっていったため全4回で1つのChapterが終わったので、より英会話表現を学びたいという学生たちの要望に応え Chapter 3：Could you repeat

表 2-2：授業配分

第一回目	1) CALL の設備を利用した Listening, Speaking 能力の強化 2) リスニングによる英文の再確認
第二回目	3) 英文の暗記・試験 4) 英語劇のグループワーク①（英語原稿作成）
第三回目	4) 語劇のグループワーク②（英語原稿作成・教員による確認）
第四回目	5) 英語の発音・演技指導
第五回目	6) 英語劇の発表および相互評価

that? を追加して取り上げた。なお、この際は、1）2）のみの手順だけ授業内で行い、3）の項目は期末考査で対象とする措置をとった。

3. 学生たちによる英語劇実践例

以上の段階を踏まえてどのような英語劇を学生たちが行ったのか、その一例を報告する。例えば Chapter12 では前述したように相手の好みを尋ねたり、何かを申し出たり（“Can I help you with anything?” 等）それに対する受け答えの表現を学ぶ章であった。具体的には、ケイコがホームステイ先でバーベキューの手伝いを申し出る、という場面が描かれているが、それを基にした学生たちの発表について紹介する。2018年7月12日に実施した学生発表では以下のようなテーマに分かれた。

これらから、物語の内容としては①実生活の経

英語教育におけるアクティブラーニング型授業の実践例とその効果——英語劇を事例として

グループ	タイトル	内容	使われた英語表現
A	I want to visit Nakatajima Dune!	中田島砂丘に初めて行く学生たちの旅行の話	Is there anything I can do?
B	Birthday Party	友人の誕生日会にて、星座を基に性格を話し合う。	Shall we hold a birthday party for her?
C	Mysterious thief Junko	怪盗ジュンコと警察が宝を巡って対立する話。	Could you take us to your treasure room?
D	The new Cinderella	シンデレラが男性という設定の物語。	Would you like to come to the party tonight?
E	The actresses	実在する欧米の女優になりきり、会話をする。	Would you like something to drink?
F	The tragedy of the fan meeting	疲れたアイドルが、友人に代わりに握手会に出てもらうようお願いする話。	What can I do for you?
G	Meeting the idol	アイドルの握手会でセルフイー撮ることをお願いする話。	Shall I take a photo for you?
H	Dating	婚活パーティーで出会った人たちの会話。	If you like, please meet me again.
I	Visiting the host club	初めてのホストクラブに行く設定。	Would you like something to eat?
J	Club Shohoku	初めてナイトクラブに行く学生たちの話。	Can I buy you a drink?

験に基づき、日常英会話的要素が強いシーンを選ぶグループ（グループ A、B）②架空の物語を基にするグループ（グループ C、D、E）③日常生活の要素は強いが想像の箇所が多いグループ（グループ F～J）の三つに分かれる。この傾向は、他の章で実践しても見られる同様の傾向である。なお、英語表現が会話の中で適切かつ、不自然ではない流れの中で使われることが主たる目的なので、内容については大きな指摘は行っていない。この表で確認できるように、どのドラマの内容も多様であり、学生たちの想像力と創意工夫が見て取れる。

4. 授業の効果（アンケートより）

以上の実践を踏まえ、2019年12月11日に2018年度にGE I・IIを受講した学生たち40名⁸にアンケートを実施した。上述したように、観光ビジネスフィールドの学生の中には短期（8月）・長期（9-12月）留学、国際交流委員会での姉妹校との交流等の活動等が12月までであるため、二年間の活動でどのような影響があったのかを探った。

学生からのアンケート結果を基に作成した表は、以下の通りである。

【設問1】昨年「GE I・II」の英語劇の実践を通し、感じた効果を教えてください。（複数回答）

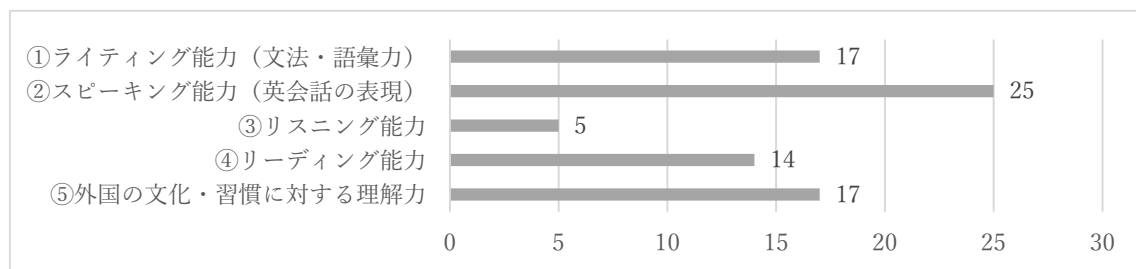


図4-1：アンケート結果（英語に関する能力）

図4-1のように、最も多かった効果は②スピーキング能力（英会話の表現）、次いで①ライティング能力⑤外国の文化・習慣に対する理解力であった。英語原稿の作成、人前での発表という点で①②が効果として上位に挙がるのは想定範囲内であったが、⑤も同じ点数となるのは想定外であった。英語原稿の作成、英語劇指導の際に文化面に対する指導も行っていたこともあり、外国語を学ぶだけではなく文化背景も学んでいたということが把握でき、英語劇実践の効果の表れと考えられる。一方でICTの活用や、発表後の相互評価でリスニング能力の向上を目的としていたがこの点は学生たちの実感としては表れていない点も確認することが出来た。

【設問2】 日常生活で、英語劇で得た効果を実感したときありますか。あればその時の状況を教えてください。

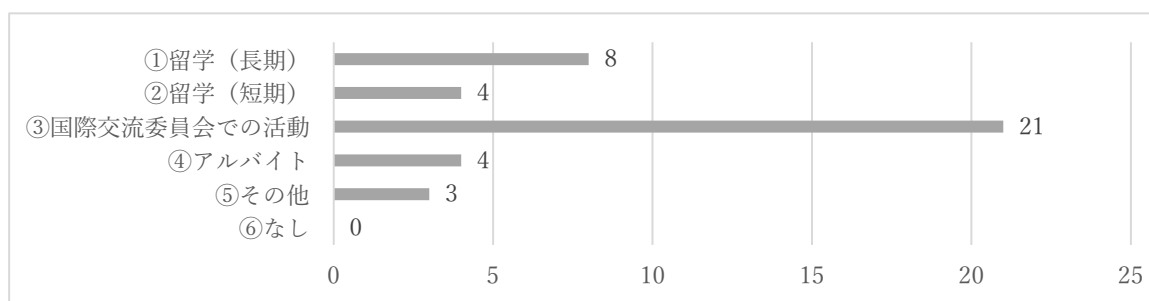


図4-3：アンケート結果（英語劇の効果を実感した状況）

次に、英語劇の実践を通して授業外で得た場面について質問を行った。すなわち、学生のカリキュラム、学外活動等でも学習内容が応用できており、英語能力向上への意欲に繋がっていたのかを確認した。全員が国際交流委員会に所属しているわけではないにもかかわらず、この表より「⑥なし」がなく、学生たちが常に英語に接触する場にあったことの確認、そして暗記した台詞テキストが実用的であることが確認できよう。

【設問3】 質問3で「効果を実感したことがある」学生に回答をお願いします。効果を実感したときの具体的な状況を教えてください。

こちらは記述式の回答のため、図4-2の項目ごとに回答を一部記す。

①留学（長期）	ホストファミリー、クラスメート、街中での会話
②留学（短期）	ホストファミリー、友人、店員との会話
③国際交流委員会での活動	・留学生に専攻を開けた（Chapter13の内容） ・留学生との会話に詰まることなく話すことが出来た
④アルバイト	・外国人に苦手意識がなくなり、丁寧な対応ができるようになった ・海外からの来客があった時に、学んだフレーズを使うことができた
⑤そのほか	・インターンシップで外国人のお客様の対応で活用出来た ・海外旅行で使うことができた

【設問5】授業でもっと学びたかった点があれば書いてください。なければ感想をお願いします。

この設問も記述式のため、学生の感想の一部を原文のまま紹介する。

「実用的な会話の練習ができて良かったです。」

「一文一文ゆっくり発音して意味を確認していたので、単語の意味も覚えやすかったですし、理解しやすかったです。」

「これから生きていく中で、人前で英語を話す機会は少なからずあると思っています。その際に緊張をするなど言うのは無理な話ですが、人前で自作の劇を英語で発表をしたという大きな大きな経験が、私の糧となって、経験をしていない人間よりもずっと緊張に耐久性があるはずだと考えています。」

「人前で英語で劇をしたりすることはしたことがなかったので最初はとても緊張したけど、チームで自分たちで考えたりして英語に対しての距離感が近くなったしとても楽しく学べた！そして留学先でも役に立ち良かったです！」

以上、学生からの回答の中でも共通して述べられている「実践的な英語」という面に特化した感想も散見された。他にも、留学生と交流をする際に英語劇で暗記した台詞そのままの会話を行えたなど、学生の英語学習意欲向上に繋がったと思われる意見もあった。すなわち「はじめに」で述べていたAL型授業の目的としていた2)学習者が実践的に英会話を行うことができるようになったか、という点は概ね達成できていると考えられよう。

おわりに

最後に、今後の展望および対策を述べたい。アンケート結果によると「実践的な英会話」を学生が習得するという点を達成できている一方、今後の展望および対策として以下の点があげられるであろう。まず、学生からの感想で「英語劇よりも日常的な英会話を学びたかった」という意見もあった。そのような意見をカバーするために、教科書のテキスト暗記を重点的に行っていたが、章ごとに英語劇を行った際に学生に対して簡潔なアンケート等を行い調整を行うのも一つの手段であろう。さらに、長期留学に行った学生からは「留学前はいつも日本語だからいまいち他人事の会話みたいな感じて、完全な暗記物のような意識で勉強してしまっていた。(原文ママ)」という意見もあり、学生の演劇発表時には外国人講師からの講

評等を入れるなどの協力を仰ぐ等の補助を検討する必要もあろう。

また、一方で学生たちの英語原稿を分析したところ、舞台設定にはそれぞれ独創性があるものの、英語表現が偏ってしまっているという点も今後の課題である。つまり、代表的かつ最も分かり易い表現を多く使用しているため、英会話の表現の幅を広げ切れていないという点である。これは、今後小テスト等を課し、定着をはかる必要がある。また、グループワークでの活動となるため英語原稿作成の際に、1. 研究の背景、で述べた①英語の四技能の強化に繋がるか、という点の評価が難しいという点がある。全部で10グループあるため、机間巡視だけでは評価することができず、期末考査等で表現の確認等を課すようにしたが、それだ

けでは四技能全ての強化が明らかになることは不十分であり、今後も対策を講じたいと思う。

以上、ここまでAL型授業の実践について述べてきたが、学生型の発信であるということ、そして実際に使用することのできる英会話を学生に身につけてもらうという点では概ね成功しているといえよう。ただ、英語劇の実践に至るまで英語劇の発音指導、人前で発表することに抵抗のある学生なども多くいるため、英語劇の実践に伴い総合的なケアを行う必要もあるということもAL型授業実践に際しての注意点となろう。

【主要参考文献】

- Ohyagi Hiroto / Timothy Kiggell 著『VIVA! SAN FRANCISCO』(Macmillan LanguageHouse)
- Bonwell, C.C., Eison, J.A. *Active Learning Creating Excitement in the Classroom* (J-B ASHE Higher Education Report Series (AEHE)) (Jossey-Bass, 1991)
- 小針誠『アクティブラーニング 学校教育の理想と現実』(講談社現代新書、2018)
- 大学英語教育学会監修『英語授業デザイン学習空間づくりの教授法と実践』第11巻(大修館書店、2010)
- 日本国際理解教育学会編集『国際理解教育』Vol.23 特集「アクティブラーニングと国際理解教育」(明石書店、2017)
- 溝上慎一『アクティブラーニングと教授学習パラダイムの転換』(東信堂、2014)
- 文部科学省・中央教育審議会「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～答申」
https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1325047.htm (2019.11.20 閲覧)

【脚注】

- 1 文部科学省・中央教育審議会「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～答申」p.37 参照。
- 2 溝上慎一『アクティブラーニングと教授学習パラダイムの転換』(東信堂、2014) p.7 参照。

- 3 英語劇の効果については、大学英語教育学会監修『英語授業デザイン学習空間づくりの教授法と実践』第11巻(大修館書店、2010) 参照。
- 4 この短期留学は国際理解科目の選択授業「海外英語研修」として登録される。
- 5 具体的には、取り上げたのは以下の章である。“Chapter11: You are one of the family now”, “Chapter12: I want to help!”, “Chapter13: So, what’s your major?”, “Chapter3: Could you repeat that?” である。なお、英語劇を実践したのはChapter11-13分である。
- 6 英語の台詞を感情を込めて読む方法、アクセントをつけて読むなどの英語発話の際の基礎的な点を資料としてまとめ、配布している。
- 7 この場合の「英語圏」とは特に学生たちの留学先、学生たちが交流する留学生の出身国であるオーストラリアを主として想定している。
- 8 学生2名の学籍異動のため、アンケート実施時は受講した42名ではなく40名に対して行った。

The Effect of Creating English Dramas in Active Learning Based upon English Class

Maya KUMAGAI

【abstract】

This paper presents the results and effects of creating English drama in active-learning based English class.

Overall, creating English drama and acting in front of the other students made students positive to speaking English and learned not only English conversation but also foreign culture. As a result, active learning based upon English class is effective to many students who have the opportunity to communicate in English in their daily lives.

【key words】

English class, Active Learning, Language Learning, Cross cultural understanding